

【6 月の気象】

6 月の季語は「入梅」「空梅雨」「梅雨寒」など梅雨に関する言葉が目につきます。

6 月は梅雨に入る時期となり、1 年で最も降水量が多くなります。梅雨は、東アジアだけにみられる現象で、春から盛夏への季節の移行期に、一般的には、日本から中国大陸付近に出現する停滞前線（梅雨前線）が、南北振動を繰り返しながら沖縄地方から東北地方へゆっくり北上します。

梅雨前線上の低気圧の影響等で暖かく湿った空気が、梅雨前線に流れ込むと、梅雨前線の活動が活発化し大雨が降りやすくなり、集中豪雨などで、災害をもたらすことがあります。近年では平成 30 年 7 月豪雨により愛媛県は甚大な被害に見舞われました。前線が長く停滞すると雨による被害だけでなく、低温や日照不足で農作物に被害が発生します。一方で、梅雨前線の活動が弱く空梅雨になると、水不足の心配をしなければならなくなることもあります。

四国地方の梅雨入りは、平年が 6 月 5 日ごろで、昨年は 5 月 29 日ごろでした。

話は変わりますが、6 月 1 日は気象記念日です。2004 年の気象記念日に気象庁マスコットキャラの「はれるん」が誕生し、今年で 20 年になります。まだまだ知名度は低いですが、全国の気象官署で広報活動を頑張っています。



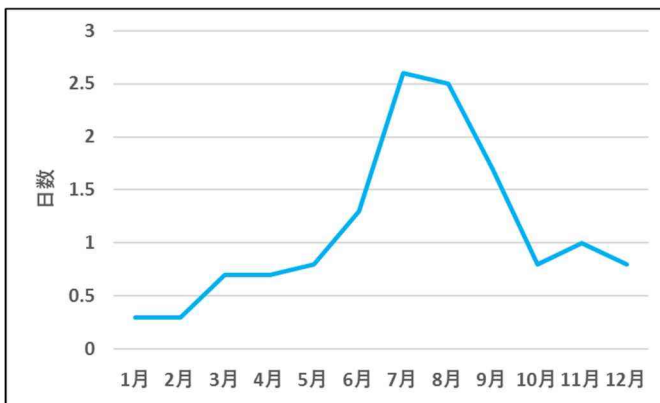
気象庁マスコットキャラ
「はれるん」

【気象用語】「雷」について

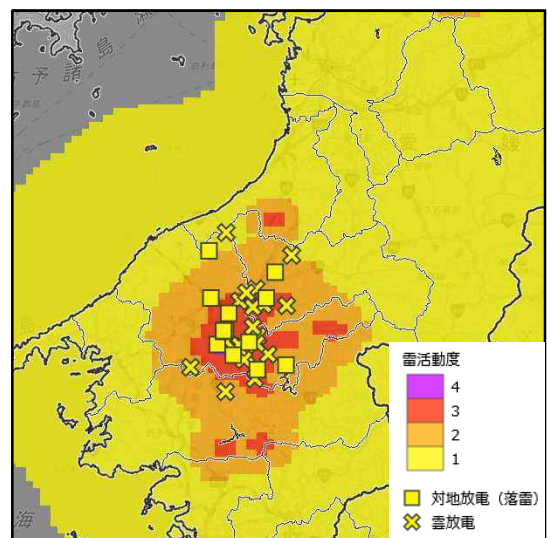
そろそろ雷の発生が多くなる時期となります。松山では、月別にみると 7 月、8 月に発生が多くなります（第 1 図）。雷は上空に寒気が入るなど、大気の状態が不安定となり積乱雲が発生・発達し、発達した雲の中で「あられ」と「氷晶（小さな氷のつぶ）」の衝突により正（プラス）、負（マイナス）の電荷分離が起こり放電する現象です。雷には「対地放電（落雷）」と雲の中で放電する「雲放電」があります。

雷は、積乱雲の位置次第で、海面、平野、山岳など場所を選ばずに落ち、周囲より高いものほど落ちやすいという特徴があります。グラウンド、平地、山頂等、周囲の開けた場所に人がいると、雷雲から直接人体に落ちる（直撃雷）ことがあります。直撃雷を受けると約 8 割が死亡すると言われています。また、落雷を受けた樹木等のそばにいますと、その樹木から人体へ雷が飛び移ることがあります（側撃雷）。木の下などで雨宿りをせず、建物中や車の中など安全な場所に避難してください。

雷が近づいてくる前に前兆現象があります。黒い雲が近づく、冷たい風が吹いて来るなどしたら雷雲が近づいてくる前兆ですので屋外にいる場合は安全な場所に移動するなどしてください。気象庁 HP には、雷ナウキャストで雷の活動度や発雷（対地放電、雲放電）の様子を見ることができます（第 2 図）。屋外で作業する場合に利用してください。



第 1 図 松山の月ごとの雷日数
(参考値 (1991 年～2020 年))



第 2 図 雷ナウキャスト
(2023 年 8 月 16 日 17 時)